

防災・減災のページ

悲劇繰り返さない

語り部から教訓学ぶ



宮城県南三陸町などで1月27～29日にあつた「むすび塾」で、参加者は約30人は、東日本大震災で津波被災した。語り部の体験を聞き、当時の避難ルートを歩いて、津波の破壊力や震災の教訓を学んだ。

元危機管理監佐藤健一さん(63)は、「ここで起きたことはほかでも起こりえる」と想定外への備えを呼び掛けた。

高さ約20㍍の津波が襲来した南三陸町戸倉地区では、児童らが当時避難して難を逃れたルートを検証。最

初避難した高台から、さらに高い所にある神社に上り、当時の校長らの臨機応変の対応を学んだ。

最終日は石巻市大川小の被災校舎で、高台避難した住民が多数亡くなつた現場で手を合わせた。市

会、女川町の七十七銀行女川支店跡

地付近を訪ねた。

児童と教職員計84人が犠牲となつた大川小では、6年生の次女(当時12歳)を亡くした元中学校諭佐藤敏郎さん(53)が遺体発見時の様子を「絶対あつてはならない光景」と言及。「先生たちも一生懸命だった。あれが犠牲になつた。長男(当時25歳)を失つた田村孝行さん(55)と妻弘美さん(53)は『災害犠牲は『仕方ない』かった』『は濟まれない』といい、悲劇を繰り返さないための検証を訴



多数の児童らが津波の犠牲になつた大川小では、遺族の話を耳に傾いた。田村弘美さんは「企業防災のあるべき姿を力説した」と評した。



田村弘美さんは「企業防災のあるべき姿を力説した」と評した。



あの日の被災地

南三陸ホテル観洋涉外部長伊藤文夫さん(73)は、「このことどもが命を守った場所として、取り壊さずに残寄りもいました。会館の責任者は「ここにどもが命を守った方が安全」と判断。従業員が入り、会館の屋上にも大人の膝ほどの水が来ました。従業員が高架水槽のある会館最上部などに誘導し、一人の犠牲者も出ませんでした。

高齢者らを屋上に誘導

15㍍以上の津波で、(4階建て)会館の屋上にも大人の膝ほどの水が来ました。従業員が高架水槽のある会館最上部などに誘導し、一人の犠牲者も出ませんでした。

気仙沼向洋高教諭畠山茂樹さん(52)は、「生き残れたのは運が良かつたとしか言いようがない」と語りました。

各地の災害わがことに

災害から命を守る要点は各地の災害をどこで思わないこと。旧校舎は震災遺構として保存されます。わがこととして考えてもうために、ここで起きたこと、津波の怖さを伝え続けます。

各地の災害わがことに

災害から命を守る要点は各地の災害をどこで思わないこと。旧校舎は震災遺構として保存されます。わがこととして考えてもうために、ここで起きたこと、津波の怖さを伝え続けます。

杉ノ下遺族会(気仙沼市小野寺敬子さん(55))は、「この悲劇を繰り返さないために、大地が揺れたらすぐ逃げろ」と語りました。

自己責任の思い持つて

より遠くへより高台へ」。慰靈碑に震災の教訓を刻みました。行政に任せきりでは駄目です。避難は自己責任だと思います。危険を察知したら、とりあえず逃げる。何もないればそれでいいのです。

宮城教育大特任准教授

小田隆史さん

一昨年の夏、アジア工科大(タイ)の防災人材を育成するコースで「学校と防災」をテーマに大学院生向けの授業を受けた。あえて「防災教育」と限らずに教えるのは、学校は防災の知識を子どもに教える場であるとともに、実際に災害が発生した際の防災管理に関する「場所」にもなっているためだ。

仙台市荒浜小周辺の上空からの様子を見ながら、当時の校長の経験談を紹介した。この学校は、地区のうちほぼ唯一津波に耐えた建物で、ここに避難した児童や地域の人々は助かっている。

すると、ネバールやバングラデシュの院生らは異口同音に「日本の学校だから頑丈で、避難場所として機能したのだろう」と言い、学校建物への投資は自国の経済力では難しく、日本の例は直接参考にならないと悲観的に断じた。

一方、石巻市大川小の惨事を取り上げる学生の表情はこわびり、首を振りながら沈黙が続き、涙ぐむ者もいた。

理解促す工夫不可欠

■「学校と防災」海外に発信

議論が進むにつれ、日々防災の研究に携わる理工系の彼ら自身が、ソフト面で地域防災に果たし得る学校の役割にも目を向けていたのだ。宮城の公立学校に設けられた「防災主任」「防災主幹幹事会」(当時の名称)の仕組みを解説すると、鋭い質問が続いた。その後、彼らは自国教員養成制度について調べ、防災の要素をいかに導入できるかを検討する最終課題を提出してきた。

国連防災世界会議が仙台で開催されたもう2年。東日本大震災の教訓を海外に伝える機会が増えたが、単に経験や教訓を異なる社会・経済・文化的背景や年齢層などを踏まえて相手が納得できるよう、丁寧な解説や議論をして理解と行動を促す工夫が必要だ。時間的・空間的に遠い出来事を「わがこと」に置き換えて受け止めてから、発信する側の誤りは続く。

年2回抜き打ち避難訓練

仙台市七郷小教頭

中辻正樹さん(57)

2013年度に文部科学省の研究開発校に選ばれ、「防災安全科」を設置しました。東日本大震災の教訓を生かし、各教科の要素を取り入れた防災教育の在り方

を模索しています。学年ごとに内容の充実を図り、6年間で一貫したプログラムを構成。気象予報士を招いた授業や、防災地の歴史を住民に聞くまち歩きな



おだ・たかし
博士課程修了。外務省専門調査員、米カリフォルニア大バークレー校女子大助教などを経て、茶年から現職。専門は地理学。防災教育・地域防災についても研究。いわき市出身。

探る

住民と連携し学習深める

気仙沼市鹿折中

安全担当主幹教諭

阿部行広さん(57)

気仙沼市の小中学校の多くで、東日本大震災の月命日に当たる毎月11日を「防災学習の日」と定め、防災を学んでいます。

朝の授業前に約10～20分間、災害の特徴や避難方法、自助の大切さなどを伝えています。

住民と連携した防災学習も深まっています。住民と一緒に避難訓練し、防災

マップづくりの街歩きで危険箇所を教えてもらっている学校もあります。

震災の記憶がない子が多くなり、被災地の学校でも地震や津波の恐ろしさを教える必要性を感じます。子どもの心をケアしつつ、災害全般に対応した学習を充実させることが課題です。

現場から

ども行っています。年に2回、休み時間に実施する抜き打ちの避難訓練では、児童が主体的に行動するようになります。児童と保護者、住民の思考力や判断力が養われています。児童と保護者の歴史を住民に聞くまち歩きな